

## ブライアン・ウィリアムズ先生に学ぶ 水辺の親子写生教室

### & はっけん号乗船体験



主催： 認定特定非営利活動法人びわ湖トラスト  
協賛： 東レエンジニアリング西日本株式会社  
後援： 大津市教育委員会

【開催日】 2023年8月27日(日)

【開催場所】 道の駅 びわ湖大橋 米プラザ 2階コミュニティルーム 光彩 (滋賀県大津市今堅田)

【参加者】 親子11組26名

… 子供12名 (小1;3名、小2;1名、小3;3名、小4;2名、小5;1名、小6;2名)

大人14名

10:00 ~ 10:10	開会 & オリエンテーション
10:10 ~ 11:00	講義; ブライアン・ウィリアムズ先生
11:00 ~ 14:50	自由写生 (~15:00 片付け・集合) & はっけん号乗船体験
15:00 ~ 15:30	作品発表 & 講評 & 閉会

### プログラム

米プラザ



### 開会 & オリエンテーション

毎年の恒例行事として人気を博している「(風景画家)ブライアン・ウィリアムズ先生(以下ブライアン先生と略称)に学ぶ水辺の親子写生教室」。昨年は事情により琵琶湖博物館屋外での開催となりましたが、今年は定番の「道の駅 びわ湖大橋米プラザ」にて、こちらも恒例行事となった「はっけん号乗船体験」と併せて開催しました。

米プラザは、1階に滋賀の特産品を販売する売店と食堂、2階に琵琶湖の素晴らしい眺めを楽しめる研修室(コミュニティルーム)があり、2015年に初めてこの写生イベントを開催して以来、ほぼ毎年利用させていただいている会場です。

当日の写生教室参加者は親子11組26名。もともと定員を大幅に上回る応募の中から選ばれた31名が参加予定であったところ、急な予定変更やお子さんの発熱などによりキャンセルの親子が出たことで定員を割る結果となってしまったのは残念でしたが、当日受付に来られた親子は皆、夏休み最終日のイベントに期待を膨らませているようで、会場の雰囲気はかなりの盛況ぶりでした。

応募して落選された方々に報いるためにも、来年以降もこのイベントを継続する場合、できるだけ多

くの方に参加いただけるよう、キャンセルを極力減らす、あるいはキャンセルを埋めるための工夫が望ましいと感じたところです。

参加証を提示して受付を済まされた参加者の皆さんは、ワクワクした表情で順に親子で仲良く席につき、始まるのを今か今かと楽しみにしている様子でした。

当日は朝から好天に恵まれ、暑いながら、写生にも、乗船にも抜群のロケーションとなりました。

冒頭、びわ湖Trustの福家俊彦理事長から開会のご挨拶を申し上げた後、注意事項等説明のオリエンテーションを経て、以降ブライアン先生に進行をお願いし、写生教室をスタートさせました。



会場からの琵琶湖の景色とはっけん号

福家理事長  
ご挨拶

## ブライアン先生 講義

まず初めに、ブライアン先生による琵琶湖の環境とその大切さについての講義がありました。

身近に存在している琵琶湖には、それを取り囲む山々の稜線を集水境界として大量の水が流れこんでいること、そこには無数の生き物が生息し、目に見えない微生物・プランクトンから大きな魚まで食物連鎖で結びついており、その糞尿や水とともに流れ込む栄養が摂取・分解されることで自然浄化が繰り返され、それによってきれいな琵琶湖が保たれていること、そしてその琵琶湖の水が人々の暮らしに欠かせない命の源になっていること。だからこそ、琵琶湖を守ることは自分たちが生活していく上でとても大切なことなのだ、ブライ



ブライアン先生講義



講義風景



ひろ子先生

アン先生は小さな子供たちにも解り易い平易な言葉で、丁寧にお話をされていました。

優しく、時にユーモアを交えながら語られるブライアン先生の話に、参加された皆さんは誰もが熱心に聞き入っていました。

講義の中では、ブライアン先生のサポートのために来て下さった(自称)「ひろ子先生」(\*)が、時折ブライアン先生をからかうような言葉を掛けられたりする場面もあり、その掛け合いがまた面白く、子供たちの笑いを誘ったりして、お二人で場の雰囲気をも明るく盛り上げてくださいました。

※ ひろ子先生； 武川裕子先生。岡山大学教育学部特別教科(美術・工芸)教員養成課程卒。  
高・中・小学校などに美術の先生として勤められた後、現在は天津市伊香立の養護学校及び京都の桂中学校で非常勤講師をされています。

琵琶湖についての講義の後は、引き続きお待ちかねの写生の講義がありました。

ブライアン先生が実際に筆をとり、窓の外に広がる琵琶湖の風景をキャンパスにお手本として描き出しながら、写生をする際のポイントを説明されました。



写生を実演するブライアン先生と、その周りに集まる子供たち

ブライアン先生は、下書きの線は入れずに直接筆で絵の具の色を画用紙に馴染ませながら、「大切なことは、描く景色の対象物(構成要素)をしっかりと見つめることだ。」と言われていました。

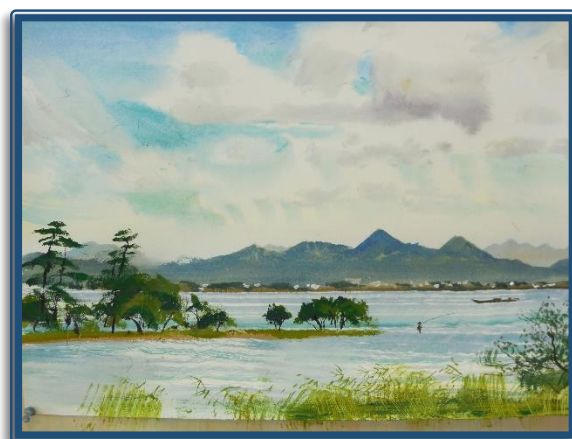
カメラで景色を写真に納める場合はシャッターを押す一瞬で全体を捕らえてしまい、細かいところまでじっくり見ることはありませんが、写生の場合は描くもの一つ一つをよく観察することが必要なため、自然と長時間向き合うことになります。だからこそ写生をすることは自然と触れ合い、自然を愛することに繋がるのだそうです。

また、雲のように白を主体とする対象は、画用紙の白色をできるだけ空白として生かしながら描いていくこと、空の青さも上から下に薄くなるよう描いていくこと、近くのものほど濃く、遠くのは少し薄く見えることなど、風景画を描く場合の基本を、実際にお手本として示しながら、短時間でスラスラと、見事な絵を描き上げていかれました。

空を描く場合は予め画用紙を霧吹きなどで濡らしておき、幅広の筆を使って手早く絵の具を広げていけばムラなく塗れることなど、プロの画家ならではのテクニックも披露されていました。

子供たちも興味津々で、次第にブライアン先生の近くに集まり、目の前でキャンバス上に琵琶湖の景色が描写されていく様子を熱心に見守っていました。

ブライアン先生のお手本が完成すると、大喜びの子供たちが順にその絵の前でブライアン先生とともにポーズをとり、記念撮影を行っていました。



ブライアン先生が描いたお手本の絵

お手本の絵の前で記念撮影



## 自由写生

さて、講義が終わるといよいよ各親子での写生の時間です。

ひろ子先生より、大人も子供もみんなが写生するよう呼び掛けがあり、子供とともに保護者の皆さんも画用紙の配布を受け、それぞれが好きな着座位置を選んで写生が始められました。



一部を除くほとんどの親子は、熱中症が心配される外を避け、バルコニーに面する会場の室内側から、ガラス越しに写生を行っていました。天気が良く、晴れ渡っていたため、ガラス越しでもしっかりと目の前に広がる琵琶湖の様子を捕らえることができました。

子供たちは勿論頑張って、自分の感性で捉えた風景を画用紙いっぱい描いていましたが、むしろお父さんお母さんの方が夢中と思えるくらい、真剣に景色を見つめながら筆を滑らせている様子が印象的でした。おそらくお子さんと一緒に写生をするのは初めて、あるいは写生をすること自体が中学校を卒業して以来という人も多かったことと思います。

大空と水面を主体に描いている人、琵琶湖大橋を中心に描いている人、栈橋に停泊するはっけん号の姿を描いている人など様々でした。

途中で飽きて投げ出してしまうような子も居らず、全員が熱心に、かつ楽しんでいる様子でした。





皆が写生を行っている間、ブライアン先生が各親子のもとを順に回り、個別に描き方の指導をされていました。ひろ子先生も同様に見回って、絵を見ながら色々なアドバイスをされていました。

プロによるこれらの直接の指導も、参加者の皆さんにとって斬新で、良い刺激になったと思います。

多くの参加者が絵を描き上げたか、または最後の仕上げ段階となった自由写生終了 40 分前頃から、ブライアン先生が何やら一人でキャンパスに向かい、絵を描き始めました。四角い画用紙ではなく、特殊な形をした紙に描いています。これはブライアン先生が編み出した画法「曲面画」の描き方です。

みるみる描きあがるプロの絵は、参加者たちの新たな注目を集める素晴らしいものでしたが、これが後程の「作品発表会&講評」の際に、例年には無かったサプライズとなりました。



曲面画を描き始めたブライアン先生

## はっけん号乗船体験

自由写生の時間内に「はっけん号」への乗船体験を行いました。

はっけん号はびわ湖トラストが様々な調査・観測・教育に利用している実験調査船で、総重量 36 トン、航海速度 20 ノット、乗船定員 16 名の双胴船です。

道の駅 びわ湖大橋米プラザに隣接して設けられた琵琶湖汽船の棧橋を停泊に利用できることから、米プラザを会場とする場合の写生教室の併催イベントとして定着していましたが、2021 年度と 2022 年度は新型コロナ感染拡大等の影響により行うことができませんでした。今年は新型コロナの感染症ランクが 5 類に引き下げられたことを踏まえ、3 年ぶりに実施することとしました。



当日は、船長・機関士などの乗務員を除く乗客定員を12名以内に抑えなければならぬ制約から、参加者親子2人1組ずつをA、B、Cの3グループに分け、各グループ4組ずつ順番に乗船してもらうこととしました。

Aグループ 乗船 11:30～12:20

Bグループ 乗船 13:00～13:50

Cグループ 乗船 13:50～14:40



琵琶湖汽船の棧橋からはっけん号に向かう参加者たち

グループごとに乗船時刻の10分前に研修会場隣の待合室に集合した親子たちは、スタッフに誘導されてはっけん号が停泊している棧橋から乗船。全員のライフジャケット着用が確認された後、甲板補助乗務員の合図とともに出航しました。

船の航路は、棧橋から一旦南方に向けて琵琶湖大橋の下をくぐり、南湖の中央付近まで行って折り返し。次に北に向かって再び琵琶湖大橋をくぐって北湖に進み、沖ノ島の近くまで北上して一時湖上停止。その後折り返し南下して帰路で棧橋に戻るというコース。約40分程度の周航時間でした。

小さなお子さんも居て、船が航行している途中で甲板に出るのは危険なことから、往路の南湖から北湖の一時停止ポイントまでは船室内で船窓から外を眺めてもらい、湖上停止のときに甲板に出て琵琶湖を湖上からじっくりと観察してもらうこととしました。

船には予め船上講師として、中島拓男先生(元琵琶湖研究所上席総括研究員)が乗船しており、船内ではっけん号の構造・機能のこと、琵琶湖の湖底地形や湖岸の状況などについて解説していただきました。皆熱心に説明に耳を傾けていました。

はっけん号船内での様子



北湖の湖上停止ポイントで甲板に出てからは、時折中島先生より地形や風景についての説明を受けながら、親子で自由に広大な湖の景色や湖面の状況などを楽しく観察しました。

その後、再び船が動き出してから、暑い日差しはあるものの、船の進行によって顔や身体に当たる風が心地よく、皆そのまま甲板に居たい様子だったため、くれぐれも転落しないようなるべく甲板の中寄りで支柱に捕まりながら観察するよう注意を呼びかけ、大半の親子は甲板上で湖上の移動景色を楽しみながら、無事全員が米プラザ併設棧橋まで帰港しました。



はっけん号甲板から琵琶湖を観察する参加者たち

## 作品発表 & 講評

はっけん号乗船も全て終了して間もなく、15時から写生の作品発表会とブライアン先生による講評が行われました。

A、B、Cのグループごとに全ての作品が会場正面に並べられ、その1枚1枚についてブライアン先生から、画用紙の白を空白としてうまく利用している、湖面の描き方に水彩画の特性がよく活かされている、橋の描き方が力強い、奥行きがあって空間が感じられる、色合いの表現が良い、細かいところが良く観察されている、など、それぞれの絵の特徴を捉えた丁寧な評価の言葉があり、誰もが自分の絵について語られているときは、少し恥ずかしく、また嬉しそうな様子でした。





中には、桟橋に停泊するはっけん号が半分しか描かれていない絵に対し、その理由が「描いているうちに出航していなくなってしまったから」と聞いて、「それは見たままを描くという意味で正しい」と言われたブライアン先生の言葉に、会場が爆笑する場面もありました。

こうして全ての絵に対する講評が終了した後、ブライアン先生から参加者へのご褒美として、子供たちによるジャンケン勝負で一番勝った子に、ブライアン先生が講義で描かれたお手本の絵をプレゼントするというスペシャル企画が実施されました。

ひろ子先生の掛け声のもと、前に集まった子供たちの中で勝ち残ったのは、小学4年生の男の子。当日学んだ絵の基本がお手本として詰め込まれたプロの絵を手にし、男の子はとても嬉しそうでした。

これで終わりと思いきや、引き続きブライアン先生が出してこられたのは、終了間際に描いていた曲面画。再び子供たちのジャンケン勝負が行われ、結果、小学3年生の男の子が見事にその絵を獲得しました。この絵は、一旦ブライアン先生が持ち帰り、ベニア板を加工して貼り付けるなど正規の曲面画に仕上げしてから渡せるようにするとのこと、ブライアン先生に住所と名前を控えてもらっていましたが、このようなプロ画家の特殊絵画をもらえることになるなど、大サプライズのことであるとしか言いようがありません。獲得したお子さんはもとより、そのご家族にとっても貴重な記念品となることでしょう。

このようなサプライズで会場の盛り上がりも最高潮となった中、無事に写生教室を終了し、最後に全員で記念撮影をして、このイベントの閉会としました。

どの親子にとっても、夏休み最終日の記念すべき1日になったと思っています。

(以上 尾藤 記)



お手本の絵を獲得した小4の男の子



曲面画を獲得した小3の男の子

前日トンガから帰国したばかりのブライアン先生が現地で撮影したクジラとの水中ダイビングの様子動画に興味を寄せる子供たち



BiwakoTrust



最後に全員で記念撮影

講師：ブライアン・ウィリアムズ (Brian Williams) 氏

プロフィール

大津市の湖西里山に在住するペルー生まれのアメリカ人です。

カリフォルニア大学で美術を専攻後、1972年に世界旅行で立ち寄った日本の自然・風土に魅せられそのまま定住。四季の移ろいを感動の心で追う風景画家として国内外を写生旅行し、数々の水彩画・油彩画・版画を作品発表されています。

大阪梅田ナビオ美術館・滋賀県立近代美術館他(1996)、近江八幡かわらミュージアム(2002)、松山三浦美術館(2006)、滋賀県佐川美術館(2007・2012)、清須市はるひ美術館(2013)、京都高島屋(2020)などでの数々の展覧会の開催をはじめ、「日本を描いて20年」(ふたば書房)、「心の風景画」(求龍堂)、「びわ湖・ブライアンの目」(ふたば書房)など多数の絵画・エッセー集も刊行。

琵琶湖博物館では、常設展示「380万年前の琵琶湖」再現原画作成(2003)に加え、2022年9月には来日50周年を記念して大型曲面油彩画(570cm×160cm)「琵琶湖・四季彩」を寄贈。現在、博物館1階中央ロビーに見事な絵が飾られています。



《《 参考1 》》 当日スタッフ

運営担当	尾藤 武	びわ湖トラスト 理事
事務局	宮畑 孝子	びわ湖トラスト 事務員
ボランティア	岩崎 功志	びわ湖トラスト 理事
	田村 慶太	びわ湖トラスト 会員
	山本 ミカ	びわ湖トラスト 会員
	齋藤 華子	Jr.Dr.育成塾四期生(中学2年生)

《《 参考2 》》 当日はっけん号運航

乗務員	吉川 一英	船長
	本村 忠土	機関士
	辻 英人	機関補助
	熊谷 道夫	運航管理・甲板補助